

# 「単年度主義」の真意

広島西 諏訪 昭浩

ロータリアンになって約一五年。気がつけばロータリーの慣習的な考え方や国際ロータリーの思想的変化に対して自分なりの理解や疑問を持つに至っている。最近、クラブの運営に大きく関わる機会があり、あらためて考えたのが、よく言われるロータリーの「単年度主義」に関してである。

「単年度主義」という用語は、実は正式な

ロータリー用語ではない。その証拠に、『ロータリー章典』あるいは『手続要覧』の中に「単年度主義」という言葉は存在しない。ではこの用語がどこから生まれてきたのかというと、それはまず、クラブの管理主体である理事会構成を毎年新しくすることが推奨されていること、そして次に「決議三三―三四」内の社会奉仕活動に関する記述に「毎年度異なつて」や「その会計年度に完了できる」といった表現が出てくることから生まれたのであろう。

ところがこれら二つは全く別のものであるにもかかわらず、これらを「単年度主義」という、いわば造語でひとくくりにしてしまつたところに大きな誤解が生じているように思う。

「決議三三―三四」の該当箇所には、「いずれのロータリークラブも、毎年度、何か一つの主だつた社会奉仕活動を、それもなるべく毎年度異なつていて、できればその会計年度内に完了できるものを、後援することが望ましい」と記されているが、さらに読んでいくと、「これは、クラブ会員の地域社会における個々の奉仕を奨励するためにクラブが継続的に実施しているプログラムとは別に行われるべきものとする」とあり、継続的な奉仕活動の後援は否定されてはいない。クラブが後援する社会奉仕活動は毎年異なつていなければならぬとは決して書かれていないわけである。よつて、これをもってロータリーの奉仕は「単年度主義」であるとするのは、大きな誤解の源なのである。

従つて「単年度主義」とは、第一義的には

クラブの管理主体である理事会を毎年刷新する、というクラブの管理運営上の方針を指すと考えるべきである。しかし、直前会長を役員とすることが規定されていることを考えると、クラブ運営にも一定の「継続性」が求められることは確かであり、クラブの活動すべてに「単年度」が要求されるものではないことに注意を要する。

「単年度主義」という用語はロータリーにおいて一定の市民権を得ているから、それを否定するつもりはないが、その真意を正しく理解しなければ、健全なクラブ運営が損なわれる危険がある。

(第一七二〇地区 広島県 不動産貸付業)